

からくわ丸主催 館地区まちあるき調査

環境情報学部3年 伊藤渚生

本調査目的

本研究では気仙沼市唐桑町を拠点として活動を行なっているからくわ丸様に今回は同行し、実際にどのような手法を用いて調査を行い、まちづくりへ展開していくのかという過程を実際に体験しながら学ぶことが目的である。

調査日程

2013年7月13日、14日 合計2日間

場所

気仙沼市唐桑町館地区

活動内容

主に地域の方のお話を聞きながらその地域の事、個人の思い出のことを聞いていくものであった。様々な場所に対してどのようにしてこの風景が成り立っているのか聞いていくことに関してとても新鮮な部分が多かった。

気仙沼市でも北側に位置しており、陸前高田市と気仙沼市街地の丁度中間あたりにある館地区は、震災の被害としてはそれほど大きくないように見える。この原因として考えることが出来るのは、今回の証言から得られることが出来た、津波の到達速度であった。ある場所では、仙台などであったようなものすごく早い津波ではなく、少しずつ水位が上昇し、人の走る速度でも逃げたらしい。しかしながら、引き波になった際にはかなり大きな威力を発揮しており、いくつかの家はそのまま持っていかれてしまったらしい。



図1

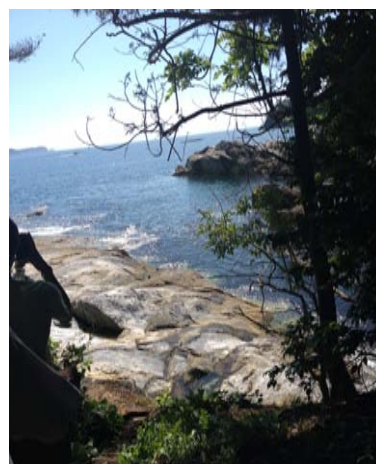


図2

赤いラインの部分が津波の到達点である。(図1)

別日には実際に山の中を歩き、自然資源、歴史資源の調査を行った。(図2) 特筆すべき点として、山岳地帯の植生や大理石海岸、この中に存在していた神社に対する昔の思い出などを聞くことが出来た。これらは今後のまちづくりの資料として非常に有効なものとなるだろう。

これまで行なってきた聞き書き調査では、テープレコーダーなど音声資源を残し、紙データを補足などに使いながら、書き起こしを行なうという手法を用いていた。しかしながら、今回のまとめ方は紙でメモしたこと、実際に話を聞いて感じたことを中心に据えながら、自分が思ったこと感じたことをフィードバックすることの出来るシステムになっていた。

この手法の弱点としては正確なことを一語一句同じ事をする事が出来ないため、情報としては若干不正確なものになってしまう点である。しかしながら、その人にとって印象が一番強かったものに対して書くので自分自身が相手に対してどのようなことを感じたのか返すことが出来るものだということが出来る。また、行った後にすぐ行わなければならないため、まとめる早さに関しても非常に早く行えることが利点であるということが出来るだろう。

【謝辞】

本調査は2013年湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワーク・ミーティング基金」と支援、からくわ丸様のご協力により行われた。